

## <前回：科学技術の神学>

「科学技術の神学」は、科学技術という人間の営みに関する神学的考察を意味しているが、含まれる問題は多岐にわたっている。この多岐にわたる諸問題を「科学技術の神学」系として総括する。

### (1) 科学技術の現在

1. 科学技術の楽観論以降。20世紀末、1990年代頃から——1980年代以降における環境危機の世界的な共有化、1979年のスリーマイル島原発事故、1986年のチェルノブイリ原発事故などを受けて——科学技術のあり方に対する批判的な反省が目立つようになってきた。

2. 政治経済の主導の下で進展してきた科学と技術の一体化（科学技術）＝国家的巨大プロジェクト（ネグリらの言う「帝国」）。

3. ハンナ・アーレント：人類が地球に誕生以来、現在に至るまで「地球は人間の条件の本体そのもの」であり、現代科学は生命、人間存在そのものを、「自然の子供としてその仲間に結びつけている最後の絆を断ち切るために大いに努力しているのである」。

→ 宇宙開発や原子力などによる「人間の条件」の根本的な変容

4. 20世紀末の転換期における科学技術をめぐる問い、そして現代の問い。アーレントの議論の延長線上。環境危機、情報化、生命科学などに関わる科学技術の倫理性の問いであり、神学的問い。

5. 「科学技術の神学」を問うために。ベルナール・スティグレール「技術の哲学」。

古代ギリシャのエピメテウス神話に基づいて人間（＝「死すべきものたち」）を本質的特質を「欠如」した存在者と捉えた上で——ゲーレンの言う欠陥生物——、技術とは人間がその欠如にもかかわらず生存するために必要な人工物（人工器官）と説明。したがって、技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在は技術によって構成され技術的存在である。

7. 図形や文字は、記憶を世代から世代へと伝えるための技術であり、先行する世代の記憶を外在化、それを次の世代が内在化することを可能にする技術。現代の科学技術は、視覚と聴覚のアナログ的総合の技術（写真と蓄音機）を経て、デジタル化へと到達。

・「精神の歴史上の一大危機」：記憶技術が産業の管理下に置かれるプロセス。

### (2) 科学技術の神学とその意義

8. 科学技術はすぐれて現代的な問題であり、現代を論じることは科学技術を抜きには不可能。それは、「解放の神学」系との連関においても同様。

9. モルトマン：若い頃から「科学技術の神学」系の神学者でもあった。

・環境の神学が「解放の神学」系と「科学技術の神学」系に両方に属していること。

10. スティグレールが、現代の科学技術を視覚と聴覚の総合技術（写真と蓄音機）のデジタル化として捉えていること。視聴者である人間の意識と文化産業が提供する視聴覚メディアをシンクロさせ、その結果、本来は通約不可能でユニークな「私」と「われわれ」（たとえば民族）の差異が消滅し、すべてが「みんな」に解消されることになる。

・「私」も「われわれ」も同一の視聴覚メディアを消費する「消費者」として同一化（＝「みんな」＝「完全に付和雷同する群れ社会」）。

このシンクロが可能になったのは、人間の意識の流れと視聴メディアとがいずれも「イメージの流れ」であるとい点で同質だからであり、この同質性は、デジタル化された視聴覚総合技術にとって極限まで高められている。

・「科学技術の神学」系のテーマである視聴覚の総合技術のデジタル化は、「私」と「われわれ」の産業的なコントロール（「みんな」化）という「解釈の神学」系のテーマと接続する。

11. 認知資本主義やハイパーインダストリアル時代（情報的および文化的な内容を商品として生産する非物質的労働＝認知労働によって現代）。デジタル化された情報技術を介して人間＝労働者の生全体（労働も消費もすべて）に資本の支配がおよぶ。

### （3）聖書の科学技術理解、その両義性

12. 「科学技術の神学」系についての議論の前提となる、「キリスト教的」な科学・技術理解を確認するために、聖書の創世物語から、科学・技術についての基本的見解を取り出す。

①神の像／支配（創世記1章）、②土の塵／耕す／命名（創世記2章）、③墮罪（創世記3章）を取り出すことができる。

・①と②という二つのキーワード：人間存在の有限性。その内、①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味するものと解釈し、②はその善性において成り立つ人間の行為と理解できる。

・「科学技術の神学」系という観点から。土を「耕す」（創世記2章15節）には「技術」へと現実化し、「命名」（創世記2章19節）には「科学」に発展する可能性が見出される。ここから、聖書の人間理解に従えば、科学・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属するものであることがわかる。

人間は本来的には、耕す存在者、つまり「農民」であり、同時に命名する存在者、つまり、「科学者」なのである。そして、これらの人間の営みは、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということからの帰結。

・①と②に対して、③は善なる本質の歪曲＝疎外を意味する→キリスト教思想における、人間存在を本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統（聖書の人間理解の哲学的解釈）。この人間理解は、キリスト教的思想の伝統をなしており、現代神学においても受け継がれている。

・ティリッヒ：この有限性と疎外（本質と実存）の二重性を、人間的生（＝人間の現実存在）の両義性と解している。人間の行為を善と悪のいずれか一方にのみ還元することは不可能であり、本質と実存の混合体としての人間の生の現実においては、善なる面と悪なる面とは不可分に結びついている。

13. 両義性は人間の営みである科学技術にも妥当。

15. ステイグレールにおいて。「近代技術の意味は両義的なものである。それは、思考の障害であると同時に究極の可能性として現れるのだ。」（ベルナルド・ステイグレール『技術と時間1 エピメテウスの過失』法政大学出版局）

### （4）遺伝子工学の衝撃と不安

16. 生命をめぐる科学・技術の飛躍的進展によって大きな恩恵と不安がもたらされた時代。

17. 求められるのが本格的な倫理的討論とそれに基づく社会的な合意形成。

前提となる批判的討論が困難であるところに、日本における問題の根深さがある。あるいは、現代日本の状況においては、遺伝子工学の衝撃が未だ十分に共有されていない。

### （5）自然とは何か？

### （6）人間とは何か？

28. 遺伝子工学を利用して優秀な子どもをデザインする可能性。優生学との関わりを含めて、欲望充足のための人間の道具化・手段化という論点。

・子どもに優秀になって欲しいとの親の願いを全否定するかのような単純な議論が成り立たないことに留意しつつ（先に加藤尚武の著書などを参照）、問題を掘りさげる必要がある。

・遺伝子工学が「人間の条件」に大きな変更を加えることによって、基本的人権を有する人間の平等性が否定されるのではないかという論点。

ユルゲン・ハーバーマス『人間の将来とバイオエシックス』(法政大学出版局、2004年)。  
29. ハーバーマスの考えも批判的に検討した上で、考察を行っているマイケル・サンデルの議論(マイケル・J・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由——遺伝子操作とエンハンスメントの倫理』ナカシニヤ出版、2010年)。

遺伝子工学(たとえばデザイナーベビー)をめぐるのは、どこまでが治療でどこからが改良・増強(エンハンスメント)かというやっかいな問題が存在するが、サンデルは、具体的な事例を検討しつつ、問題点を次のように取り出している。

「子どもを贈られたもの(gift)として理解することは、子どもをあるがままに受けとめるということであり、われわれの設計の対象、意志の産物、野心のための道具として受け入れることではない。」

30. 子どもの予測不可能な性質を受け入れる態度。サンデルは、神学者ウィリアム・F・メイ(William E. May)の「招かれざるものへの寛大さ」(openness to the unbidden)を参照。

・被贈与性への感覚こそが、支配の衝動の歯止めとなる謙虚さの源泉であり、「いのち」とはまさに神の贈与であるとの理解は、キリスト教の土台(「部分的には、宗教的感性」)。遺伝子工学の時代において、キリスト教思想がさまざまな思想と共有すべきもの。被贈与性は宗教だけのものではなく、「世俗的な言葉で表現することもできる」。島菌の言う「宗教的背景について自覚的に、宗教的な伝統がもつ強味を多元的な現代社会にふさわしい形で生かしていくような学術のあり方」はここにその可能性が確認できる。

## 1 2. モルトマン

### (1) 前期モルトマン

#### A.モルトマン神学の位置

1. ユルゲン・モルトマン『わが足を広きところに——モルトマン自伝』新教出版社。

#### 第一部 青少年時代

##### 第一章 入 植

##### 第二章 一九四三年七月のゴモラ作戦

##### 第三章 戦争捕虜(一九四五—一九四八年)

#### 第二部 見習い期間

##### 第一章 ゲッティンゲンにおける神学生(一九四八—一九五二年)

##### 第二章 ヴァサーホルストの牧師(一九五三—一九五八年)

#### 第三部 初 め

##### 第一章 教会立ヴッパータール神学大学で(一九五八—一九六四年)

##### 第二章 公共的神学からボンへ

#### 第四部 希望の神学

##### 第一章 希望の神学(一九六四年)

##### 第二章 キリスト教とマルクス主義の対話の中で

##### 第三章 私のアメリカへの夢

#### 第五部 政治的神学

##### 第一章 テュービンゲンにおける第一の始まり(一九六七年)

##### 第二章 テュービンゲンにおける第二の始まり(一九六八年)

##### 第三章 全世界への講演旅行(一九六九—一九七五年)

##### 第四章 バンコクでの世界宣教会議(一九七二—七三年)

##### 第五章 極東への道(一九七三—一九七五年)

#### 第六部 新しい三位一体的思考の十字架のしるしにおいて

- 第一章 十字架につけられた神（一九七二年）
- 第二章 神学的地平の拡大
- 第三章 エキュメニカルな地平の拡大
- 第四章 場所と地位
- 第五章 キリスト教とユダヤ教の対話
- 第七部 未完成の完成——生の挑戦
  - 第一章 新しい三位一体的思考
  - 第二章 ギフォード・レクチャー（一九八五年）エディンバラにて——創造における神
  - 第三章 中国への私たちの長い行進（一九八五年）
  - 第四章 女性また男性として神について語る エリーザベトとの共同の神学
  - 第五章 生への新しい愛
- 第八部 終わりの中に始まりが
  - 第一章 終わりと始まりの祝い
  - 第二章 新しい重要点

## 2. 森田雄三郎「現代神学の動向」（1987年）

「第三の新しい動向を代表するのは、J・モルトマンであり、彼を一躍注目させるに至ったのは、『希望の神学』（一九六四年）であったことは、あまりにも有名である。モルトマン神学はやがて「革新の神学（革命の神学）」の展開をうながし、その後のWCCの神学的基本線を提供する。かつてバルト神学に賛同した人々のうち多くの者は、この流れに参加して行った。このようなバルト派の動向に関するかぎりでは、若きバルトが社会主義者から「神の言」の神学者へと超越して行ったのと、逆方向に向かっているとも言えよう」（41）。「モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはブロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる「批判的理論」の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。しかし、この三部作は、その後出版された『三一神と神の国』（一九八〇年）によれば、なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまることを、モルトマン自身が表明している。この書以後の彼の著作を見ると、直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である。したがって、ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上での一つの重要な焦点をなすとも言えよう。」（41-42）

## B.モルトマン「政治的宗教の神学的批判」：「解放の神学」系

・モルトマン／メッツ『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。（*Kirche im Prozess der Aufklärung ---Aspekte einer neuen* 《*Politische Theologie*》, Chr.Kaiser, 1970）

「J・B・メッツが数年前提唱した「政治的神学」への要求、「C・シュミットの『政治的神学』（一九二二年、再版一九三四年）を書棚から見つけ、辞書の当該項目をしらべ、この概念がいかかわしいものであることを見つけ、この新しい要求を、ものの役に立たぬ政治的な概念に対する神学的な試みときめつけた」（18）

「ドイツのプロテスタンティズムでは、政治的なことは弱点である、とりわけ民主的なものになるとそうであり、そのようなことは今日始まったことではない」（19）

「バルト」「政治的責任を自覚した教会は、説教が政治的になること——たとえ言葉で『政治的』なことを言わなくとも政治的に理解されることを欲し、要求するであろう」「政治的なものは、教会の働きの個人的で任意な帰結としておくならよいが、しかし義務づける

徴候となることはゆるされない。民主主義といったものにさえも、教会は明らかに政治的委託をもつべきではない」(20)、「人びとは明らかにこう考えている」(21)

「神学は今日責任ある神学たろうとするならば、自己の言葉、像、象徴の心理的・政治的意味あいを批判的に考察しなければならない」(23)、「はたして民衆に宗教という阿片を与えるのか、それとも真の自由の醸酵素を与えるのか、自問しなければならない」(24)

「政治的神学とは、近代においてキリスト教神学が自覚的に遂行されてゆかなくてはならない分野、状況、場所、舞台をあらわしている。政治的神学は、すべてのキリスト教神学に政治的自覚を呼び覚まそうと意図している」(25)

「政治的宗教とその政治的神学における形成とは、何もキリスト教の発明ではなく、古代の異教的宗教の本質である。政治的に十字架につけられたキリストにその源泉をもって以来、キリスト教信仰とキリスト教神学とは、つねに諸民族・諸国家の政治的宗教と戦わざるをえなかった」(30)

「ペーターゾン」「政治的神学」「theologia civilis」「genus politicon」という表現は、ストアの哲学から来ている」「アウグスティヌス」「『神の国』第四卷十二章」(31)

「無神論という非難は、国家の神々に公共的、実践的に不敬虔なことをする行為にのみ関わりがあった」(32)

「既存のローマの国家宗教を「キリスト教化」したが、しかしそのさい反面、自らを「宗教化」した。つまり現存の国家理由の意味で「政治化」した」(33)

「E・ペーターゾンは、C・シュミットの『政治的神学』(Politische Theologie)」(一九三三年)に反対して書いた、有名な「論文」、「かなり早くからキリスト教哲学者は、聖書的唯一神論をアリストテレス学派の哲学的唯一神論と結びつけることを試みている。しかしこの形而上学的唯一神論は、根本的には専制主義[君主制]であった」(35)

「万有はひとつの専制主義的構想をもつ。ひとりの神——一つの世界。このように神は、現実全体の統一性へ結びつけられ、この統一性の象徴ないし統合点とされる。自然的神学におけるこのような唯一神論的世界理解に対し、政治的神学におけるひとり皇帝の帝国主義が対応している」(36)

「三位一体論の形成とともに、キリスト教神学は宗教-政治的唯一神論から自由になった。直ちに事実においてそうならなかった場合でも、原則的にそれを打ち破った。私の考えでは、今日にいたるも政治的宗教に対する批判は三位一体論の政治的効能である」(38)

「三位一体論を自由に放棄してゆくことは、キリスト教信仰がキリスト教世界の政治的宗教に自覚的に融解してつくことのしるしである」(38)

### C. 『二十世紀神学の展望』(新教出版社、1989年)

「I 二十世紀における神学の道」(1984/1988)、「II 今日の神学の調停」(1986/1988)、「III 戦後ドイツの神学」(1984)、「IV 希望の神学」(1985)

「二十世紀における教会とキリスト者とは、歴史上ほとんどの世紀にもかつてないほどに、異論と反対と迫害に出会わざるを得なかった。・・・キリスト教信仰のこの近代の経験は、もうひとつの別の「調停の神学」を、つまりキリスト教の使信を単に適応によってのみならず対峙することによっても調停し、対応ばかりか必然的な対立をも呼び求めている。政治神学は、この種の一連の調停の神学全体の出発点となった。すなわち、革命の神学、解放の神学、黒人神学、フェミニスト神学、そしてその他のアジア・アフリカにおける地域的に規定された「文脈的」神学である。これらの神学的基礎の一つは、終末論的救済を歴史的解放でもって調停する「希望の神学」の内に見出せる。」(118-119)

「カント」「わたしは何を望んだらいいか」「それまで宗教は常に永遠なるものに向けられ、伝統に基づいてきた。だが、近代の開始以来、未来が人間精神の中心になった。宗教

「問いは希望の問いに、人格的、社会的、普遍的希望の問いとなる」、「未来に開かれた世界史」、「恐れと希望の中で人間はこの未来を精神的に先取りする。」(119)

「新しい政治神学」(212)

「もし、「わたしの神学の構想」を箇条書きにまとめなければならないとすれば、恐らく、最小限次のように言うに違いない。わたしは、

——聖書に基づいた、

——終末論的に方向づけられた、

——政治的な責任を負う、

神学を考えようとしている、と。」(221)

## (2) モルトマン、宗教と科学の対話と自然神学の課題

### D.モルトマン神学の展開と科学論

1. モルトマンの思索は、1980年以降になると、大きな転換を迎える。森田が、「直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である」(同書、42)と論じる通りである。

・前期から後期の全体を貫く隠れた思索の線として「宗教と科学」関係論に注目する。

2. モルトマンを一躍有名にした『希望の神学』とほぼ同時期の諸論考において、モルトマンはすでに科学あるいは科学技術について言及を行っている。

・『神学の展望——現代社会におけるキリスト教の課題』(1968)の第一二論文「近代科学の世界における神学」(1996)。ここでモルトマンは、現代の状況において、神学と自然科学が、「互いに関連なく並行して、もはや何も言うべきことがない発言の葛藤喪失の中」にあって、「互いに意味なく並存している」(Moltmann, 1968,269f.)こと、つまり、「精神神学と自然科学との間の溝」(ibid., 271)が存在する。これは、19世紀から進展しモルトマンの前世代の神学者たちが共有していた分離論がもたらした事態であり、精神的営みは「様々な真理の諸領域」に別れ、「近代精神におけるこのような複線化」(ibid., 272)が進行しつつあるとされる。

3. しかし、モルトマンがこの分離論にとどまることはできないと考えている。

「現代科学は、現代の技術の可能性と解きがた結合されている。それはさらに社会全体の巨大科学と国家的計画においてなされるべき投資に依存している。このような投資は、かかる企画において人間を尊重する生の未来が求められる場合にのみ、意味深いものとなる。ここに政治と社会全体と考慮されるべき未来のヴィジョンとが、相互依存の関係にあることが告げられる。」(ibid.,285)

4. 前期モルトマンについて。まず、論文「近代科学の世界における神学」における科学技術の議論は、前期モルトマンにおける周辺的な問題ではなく、『希望の神学』から始まる神学構想自体に含意されていたと言わねばならない。たとえば、論集『神学の展望』の第一論文「希望と計画」(1966)で、モルトマンはカントの歴史哲学に言及しつつ、次のように論じている。

「キリスト教的希望は、未来を宿命的にタブー視してはならない。それはまた、神信仰の助けによって未来に対応できるなどと考えるとはならない。しかしまた、展望することのできなくなった世界の中で、人間は『頭を高く上げて』意義深い目標を認識し、それに向かって人間的また物質的諸力を投資する勇気を見つけるために努力すべきなのである。」(ibid.,268)

神の事柄である約束と希望は、人間の主体的行為と未来に向けた計画性を廃棄するものではなく、むしろ両者は結びつけられるべきなのである。まさにこの人間の計画性は、すでに見たように、現代世界において、科学技術から分離することができない。モルトマン

神学において、科学の問題は確かに目立つテーマではなかったとしても、前期の思索において意識的かつ継続的に取り組まれていたのである。

5. 次に。モルトマンが宗教と科学との継続的な対話の課題として位置づけていた「純粋な客観性を越えて新しい倫理を求める責任」が、『十字架につけられた神』(1972年)とほぼ同時期の論文で、さらに踏み込んで論じられている。モルトマンは、『科学と知恵——自然科学と神学の対話』(2002)第九論文「人間の倫理と生化学的進歩の道德性(エトス)」(1971)で、「ウイルスおよびバクテリア性感染症の克服」「無菌世界というヴィジョン」、「向精神薬の発達」「痛みなき世界」、「臓器移植技術」「交換可能な身体」、「新しい優生学」といった生命倫理をめぐる諸問題に言及しつつ、「このような人間の関心、希望、ヴィジョンに基づいて、生化学の進歩そのものが、人類の偉大な倫理的企てとなるのである」(Moltmann,2002,155)と主張している。

6. 「まさに生医学的進歩は幸福を保証するものではないのだから、それに対応すべき人間性の倫理は、苦痛の医学的緩和や一定の病気の追放だけでなく、苦痛や病気や死を人間が受け入れ、意識的に自らのものとする、これらに目をとめなければならない。身体の秩序が人間の人格の秩序と統合されねばならないように、生医学の進歩もまた、人間性の秩序の中に統合されねばならないのである。」(ibid.,169)

7. 新しい倫理、人間性の倫理。これこそが、宗教と科学が相互の対話において問われるべき共通課題なのである。

#### E.後期モルトマンと自然神学

8. 前期モルトマンは、宗教と科学の分離論が支配的な状況下で対話の必要性を意識していたが、この問題が具体的に展開されるのは、1980年代以降の後期の思索における新たな神学構想を待つ必要があった。

1985年の『創造における神』において、モルトマンは、現代の環境危機との関連でキリスト教的創造を再考する試みを行っているが、神学がこの環境世界・生態系を神の被造物として認識する根拠を論じる際に取り上げられるのが自然神学なのである。

9. 自然神学とは、これまで繰り返しなされてきた「自然が神認識のためにどんな貢献をするか」を問うものではなく、「神概念が自然認識のために」、従って環境論を展開するために、「どんな貢献をするのか」(Moltmann,1985,66)を問題にする。自然神学と啓示神学を二つの分離可能な神学的営みとする従来の標準的理解を修正する試み。

『自然神学』と『啓示神学』の区別は誤解を与える。神は一なるものなのだから、二つの相違した神学があるのではなく、ただ一つの神学があるだけなのである。しかし、この一つの神学は、様々な状況と時代的制約下にある。この状況と時代的制約は、そのつどの神の現在の様態(modus praesentiae Dei)によって決定される。」(ibid.,72)

10. 1980年から始まった新しい神学構想は、『創造における神』(1985)を経て、モルトマン神学の方法論とも言える、『神学的思考の諸経験』(1999)において完結したが、この『神学的思考の諸経験』で、自然神学について「宗教と科学」関係論において果たすべき役割が明確に論じられている。

11. モルトマンは、第一章「神学とは何か」(神学体系の序論的考察)を締めくくる最後の第六節において自然神学についてまとめた考察を行っている。それは、「キリスト教神学の前提としての自然神学」「キリスト教神学の目標としての自然神学」「キリスト教神学自体が真の自然神学である」「キリスト教神学の課題としての自然神学」の四つの部分にわかれているが、ここでモルトマンは、現代のキリスト教思想の課題を、『被造物の神学』は、現代の新しい生態学的危機と挑戦に立ち向かわなければならない」(Moltmann,1999,82)とした上で、この課題を遂行するために、「自然科学と科学技術との

共同作業のために、私たちは、『自然神学』の枠組みを必要としている」(ibid.)と述べている。

↓

自然神学が神学と科学、宗教と科学との共同作業（おそらくは対話に基づく）の基盤を提供する役割を果たす。

12. 後期モルトマン。20世紀のキリスト教思想は、対立論を分離論において乗り越え、さらに環境危機という共通課題に取り組むための対話論へとたどり着いた。しかも、こうして展望された共通根拠は、宗教と科学との共同作業を遙かに超えた射程を有しているのである。

「様々な宗教共同体が、多宗教的社会とグローバル化した世界において、共に生きていくのに応じて、これらの宗教共同体は、……それらのもろもろの差異を表現できる、共通の場所を見出すであろう。……宗教性は世俗性と同様に、共通の生に奉仕しなければならない。」(ibid.,84)

13. 宗教と科学との対話を可能にする共通根拠は、同時に、複数の諸宗教相互の、そしておそらくは複数の世俗性相互の多様な対話をも可能にするものとなる。

#### <参考文献>

1. C・シュミット：『政治神学』『政治的なものの概念』『政治的ロマン主義』未来社。
2. 長尾龍一編『カール・シュミット著作集Ⅰ 1922-1934』慈学社出版（「政治神学——主権論第四章——一九二二年」「政治的なものの概念（第二版）一九三二年」）。  
『カール・シュミット著作集Ⅱ 1936-1970』慈学社出版（「政治神学Ⅱ——「あらゆる政治神学は一掃された」という前節——一九七〇年」）。
3. F.S.Fiorenza/ K. Tanner/M.Welker (Hg.)  
*Politische Theologie. Neuere Geschichte und Potenziale*, Neukichener, 2011.
4. Graham Hammill & Julia Reinhard Lupton (eds.),  
*Political Theology & Early Modernity*, The University of Chicago Press, 2012.
5. モルトマンの主要文献は、新教出版社から翻訳が出版されている（原書は、カイザー社から）。以下は、主要な（？）日本語の研究書。
  - ・喜田川信『歴史を導く神——バルトとモルトマン』ヨルダン社、1986年。
  - ・組織神学研究会編『ユルゲン・モルトマン』聖学院出版会、1998年。  
大木英夫、佐藤司郎、朴憲郁、森本あんり、深井智朗
  - ・沖野政弘『現代神学の動向——後期ハイデガーからモルトマンへ』創文社、1999年。
  - ・森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005年。
- Moltmann(1968) : *Perspektiven der Theologie. Gesammelte Aufsätze*, Chr.Kaiser.  
(1985) : *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr. Kaiser.  
(1999) : *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*, Chr.Kaiser.
6. 芦名定道「現代キリスト教思想における自然神学の意義」、京都哲学会『哲学研究』第596号、2013年、pp.1-23。